

調査結果の概要

■平成29年度の成果

- 有明海・八代海の計16地点で表層水温(1時間値)を測定(平成29年11月～平成30年5月)。
- 関係機関等へのヒアリング結果
有明海では、気候変動によりノリ養殖漁期の短縮や貝類の捕食魚であるナルトビエイの増加等の影響がでている、鹿児島県では、温暖化(水温上昇)に伴い、漁獲対象種の変遷がみられる、有明海では、東シナ海からの黒潮の入り込みによる温度変化も検討する必要がある、などの成果が得られた。
- 既存資料結果
有明海・八代海への出水頻度の増加に伴う漂流物の増加、漁業影響が懸念されている。主要魚介類のうち、62種の生息最適水温域、最適塩分域の情報や干潟域に生息する希少動植物を含む底生生物のうち50種について、生態、生息条件等が明らかになった。



有明海・八代海水温測定地点
(一財)九州環境管理協会作成)

■明らかとなった課題

- 海洋シナリオ、数値シミュレーションにより、どこまで詳細に温度変化、塩分変化を把握することができるかが課題。

■平成30年度の調査計画

- 漁場・干潟環境調査(有明海、八代海):平成29年度からの継続
- 生息地推定モデルの構築
- 海洋シナリオを用いた数値シミュレーションの実施

主要魚介類の生息最適水温域及び最適塩分域の一例

魚介類	最適水温	最適塩分
マイワシ	14～17℃(産卵) 12～17℃(稚仔魚出現)	18.5～19.2‰(産卵)
コイチ	19～23℃(産卵)	17.5‰以下(産卵)
タチウオ	19～23℃(産卵) 16.8～26.3℃(稚仔魚出現)	33.01～34.63‰(稚仔魚出現) 33‰以下では出現なし

出典:「新版魚類学(下)」落合明
「沿岸至近域における海生生物の生態知見」海洋生物環境研究所
「水産海洋ハンドブック」ほか